HISTORY OF 熊本人

松田喜一（まつだ きいち）

◆鈴木 喬 著（歴史家）

農聖とたたえられ、土の行者などとも呼ばれた松田喜一は、明治二十年（一八八七）十二月に豊川村（現松橋町）の松崎に生まれた。松田家は農家であり、喜一は小学校卒業後、県立農学校に入学した。

同三十八年三月、農学校を卒業した喜一は、そのまま学校の助手に残ったが、同じ年に、当時出水村にあった農商務省の農事試験場九州支場の助手に転じている。二十歳の徴兵適齢に達した四十年には、一年志願兵として第六師団の輜重隊に入隊し、翌年少尉に任官して帰郷した。

そののち、豊川の自家農業に従事していた喜一は、四十四年、新設された県立農事試験場に県技手として勤務することになり、ついで県技師に進み、日本各地を巡って農事研究に努めた。そのときの研究の成果として松田式麦作法を発表し、これが三・四年のうちに全県下に普及したので、松田喜一の名は県内の隅々にまで、麦作法の松田として知られるようになった。彼は麦作だけでなく、稲・粟・大豆・甘藷などについても新しい栽培法を工夫していたが、農民生活の向上には、その組織化と普及のための雑誌の発行が不可欠であることを痛感した。

そこで大正七年（一九一八）農友会を結成し、熊本市の公会堂で発会式を行ったが、そのときの出席者は何と七千人にも達し、会場内は立錐の余地もなく、外まで溢れた人々で広い敷地内が埋まった。同じ年に「農友」という雑誌の発行も開始し、農業の知識をひろめたが、県の試験場の職員としての活動には限界がある。

「農業は論より証拠だ。実地で指導しなければ農民は納得しない。そのためには自分が農場を持ち、そこに農家の後継者を集めて、直接指導しなければ駄目だ」

と考えた喜一は、大正九年に思い切って試験場を退職し、肥後農友会実習所を黒石原（現西合志町）に設け、さらに阿蘇郡色見村（現高森町）にも分場を置き、実地指導を開始した。

ここは両方とも台地であったので、彼は集ってきた百人余りの実習生とともに、まず陸稲つくりに取組んだ。ところが昔から開墾の手の入っていない火山灰台地は、いかに努力しても普通の収穫を実らせてくれない。他の野菜類の栽培では一応成功したが、肝心の陸稲が思うような収穫をあげないため赤字続きで、大正十三年には財産全部を差押えられる羽目になった。このままでは目指す農業後継者の育成はおろか、生活にも事欠く有様で、彼の生涯最大の難関だった。

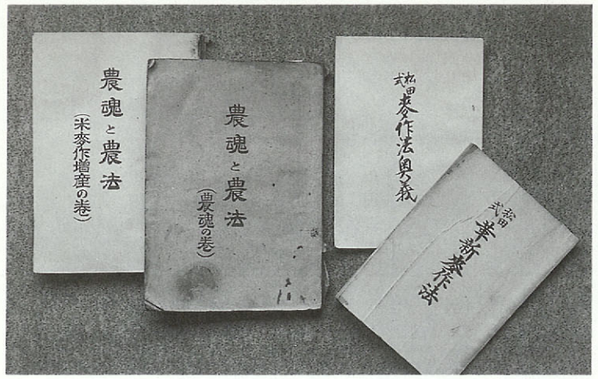
その最中の同十四年、県知事中川健蔵は喜一を県営八代干拓事業の嘱託とし、干拓地の造成事業を委嘱してくれた。この干拓地は翌年完成し、昭和二年に第二回入植者を選考して実働しはじめ、昭和村という独立村となった。喜一も翌三年に実習所を昭和村に移し、この地で教育経営を再開する。黒石原での失敗が「土つくり」にあったので、干拓地の土つくりの研究に没頭した。彼の口癖の「土つくれ・人つくれ・作物つくれ」の「三つくれ」、「仕事に惚れろ・土地に惚れろ・嫁に惚れろ」の「三惚れ」などは、このときにも実習生達に繰返したたき込まれている。

日華事変から太平洋戦争中にかけては戦時下の食料増産のために、実習所の指導をしながら県下の実地指導に歩きまわり、傍ら講演に明け暮れる多忙な毎日だった。その中で昭和十七年と十九年の昭和村の大潮害で、頼みの実習所が使えなくなったため、松橋に農場を開き、豊川には実習所の分場を置いた。こうした長年の功績によって、十九年十一月には藍綬褒章を受賞している。二十年には昭和村はやっと復旧したが、熊本の農友会病院は戦災で焼失してしまった。しかし喜一はくじけず前進し、この年西日本文化賞を受賞した。

昭和二十四年には昭和農場に天皇の御巡幸があり、その後、高松宮、三笠宮も現地を視察された。彼の実績が世間に高く評価されたのである。二十七年には熊日社会文化賞を受け、二十九年熊本県近代文化功労者に推戴された。農友会実習所は昭和農場とも松田農場とも呼ばれていたが、三十二年にはこれを正式に県に寄附している。四十一年に勲四等瑞宝章を受けるという栄誉を残し、同四十三年七月三十日、八十一歳でなくなった。

松田農場の卒業生は全国に三千四百人、講習生は四万三千人にも達した。喜一は自ら鍬を取って実習生を教え、自らの体験を文章にして会員を導き、九州一円はもとより中国・四国まで講演に飛びまわった。月刊雑誌「農友」も五十年間書き続け、著書は五十冊にも及んでいる。八代市昭和日進町の松田記念公園には彼の銅像が建設されて、その遺徳を偲ばせており、平成元年には松橋町の松崎に生誕地の碑も建てられている。

雑誌『農友』



松田喜一の著書

肥後農友会実習所